

## 「地域」を問い直す

荒井 英治郎 (信州大学学術研究院総合人間科学系)

### 1. はじめに

本稿は、2020年度に開講した教職科目(選択)「現代社会と教育問題」(2020年11月10日)の授業にオンラインゲストとしてご参加いただいたゲストティーチャー(前川浩一氏:美麻小中学校地域学校協働コーディネーター)の講演内容を再構成したものである。記録作成に当たっては、本学の学生である原龍馬さんに尽力いただいた。記して感謝を申し上げます。

### 2. ゲストティーチャーの話

#### (1) 自己紹介

【ゲスト】皆さんこんにちは、文科省のCSマイスターで、美麻小中学校の地域学校協働コーディネーターの前川と申します。今日はよろしく申し上げます。私は、「地域づくり」と「コミュニティ・スクール」ということとお話したいと思います。その中で、「地域学校協働活動」という言葉があるのですが、これが「地域づくり」にどう関係してくるのかを中心に話したいと思っております。

私自身が大阪からの移住者です。現在は、本業が何か分からない状態で暮らしています。活動は、学校の支援コーディネーターという名前で平成25年からやっていますが、学校づくりに関わってきました。地

域では、地域づくりと移住者の交流を中心に進めてきました。美麻での地域づくりが私の活動の基本になっています。

#### (2) 美麻での地域づくりの始まり

【ゲスト】長野県大町市は人口が27000人を切った、そのような状況です。私たちが住んでいる場所が旧美麻村ですが、平成の合併で美麻地区となりまして、合併当初は人口1300人ぐらいでしたが、今は900人に減っています。正確に数えたわけではありませんが、移住者の割合が40%は超えているだろうと思います。私が住んでいる地区は70%を超えています。

この地域で住民の自治組織の美麻地域づくり会議というものを合併の時に協議

して作りました。これが私たちのまちづくりの原点です。これが学校にも影響しています。美麻小中学校は、現在は義務教育学校ということで小中一貫校として進んでいます。現在生徒数が96名、小規模地域特認校制度があり、大町市の他地区から通うことができるようになっています。それから、山村留学制度はもう30年以上続いており、全国から子どもが来ています。ちなみに一番生徒が少なかった時は70人台でした。今はそれから増えています。

私たちの地域づくりは、市町村合併を契機に始まりました。実は私は国際交流の活動の支援をやっていたのですが、途中からまちづくりに転換しまして、自分たちで自治組織や地域自治組織を作って、それから住民自治や協働について学ぶようになりました。こういうことをやりつつ村に働きかけて、住民自治組織を考えようという活動をやった結果できたのが美麻地域づくり会議で、これは合併と同時に始まりました。この時点において、本当にあの時全部数えると100回ぐらいの議論をやっています。この熟議が今に続いているのです。これが非常に大事なところだと思っています。その美麻地域づくり会議ですが、公民館や学校、PTA やすべての自治会が入っております。市からの助成金も頂いていますが、全ての家庭からも協賛金としてお金をいただいています。地域の様々な事業をやっていますし、特に情報発信、あと先進地視察から学ぼうということも、非常に力を入れて取り組んできました。それから、朝市や定住促進といった合併の時に非常に危機感を持って行ってきた活動が、現在の市のスタンダードになっています。特産

品開発も行っています。私たちの今の最大の課題は、小さな拠点づくりというものです。持続可能な地域のための会社を作ろうということで今活動しています。

それから学校支援事業を、総合学習を支援するということから始めました。情報発信は非常に重要視しており、まず誰でも使えるホームページを制作しました。これは、学校の授業において子どもたちもよく使っています。それから広報誌を住民で発行しています。松代へまちづくりを学びに行ったときに広報の重要性を知り、私たちはまず印刷機を買うところから始めました。これは、学校や支所、それから保育園も参加して、地域で新聞を作っています。

私たちの地域づくりは、まず自分の住む地域の魅力発見ということから始めました。私が移住してきた29年前は、地域には地域のことを良く思わない住民が多くいました。皆口をそろえて「何もないところ」、「寒いところ」、「山しか無い」と言っていました。合併直後のアンケートを子どもたちにしたら、将来美麻に住みたいという子どもが全然なくて非常にショックを受けました。そこで、まず住民が地域の魅力を知ること、それから子どもたちにも地域の仕事や資源を知ってもらう活動をする必要があると考え、地域を見直す活動を始めていきました。

### (3) 「学社融合」から「コミュニティ・スクール」へ

【ゲスト】私たちの「学社融合」から「コミュニティ・スクール」ということで、まず学社融合についてお話ししたいと思います

す。美麻では、カリフォルニア州メンドシーノとの国際交流事業が29年近く続いています。行政と地域による協働で実行委員会を作っています。それから、ボランティア中心でこの交流の企画や授業、引率など様々なことを進めています。ここで大事なことは、こういう活動は職員も学校も異動があります。ですので、関わっても3年とか4年になるのですが、住民は継続的にこれに関われる。要するに、地域の役割として、住民に主体性があるということ、継続性があるということ、これが非常に大事なことだと思います。

さらに学社融合の始まりとして、地域づくり会議の事業のひとつとして、総合学習を位置づけました。総合学習にボランティアを派遣し、長野大学を繋ぎ、様々な動機づけ授業から始まり、普段の授業の支援をやっていきました。このような活動が学社融合の始まりです。このようなことがありまして、美麻小中学校が平成25年にコミュニティ・スクールの推進検討会議を発足させます。私たちが地域づくりの活動でシンポジウムに山口県に呼ばれた時に、初めてコミュニティ・スクールの事例に出会いました。地域づくりのメンバーや当時の校長先生が、これは私たちの地域に合っているのではないかと感じ、そこから話し合いに発展し、教育委員会に働きかけたという経緯があります。

そして、その後システムを作っていく、平成26年4月に学校運営協議会を設置して、コミュニティ・スクールになりました。その際に小中併設校だった美麻小中学校を小中一貫校にしました。併設と一貫校では大きく意味が違いますので、これが非常

に大きなポイントです。その後小規模地域特認校制度を導入したり、義務教育学校と実際に名前を変えたりしました。

#### (4) コミュニティ・スクールとは

【ゲスト】まずコミュニティ・スクールについてお話します。学校運営協議会という制度が法律で定められています。これは学校運営について協議する場所です。これが非常に重要です。それから地域学校協働本部です。これまでは、学校支援ボランティアという言葉で言われてきましたが、ボランティアとして学校と関わる組織のことです。この2つが協働し、特に意志の共有をすることで、同じ方向の活動を産むわけです。これを「地域学校協働活動」と言って、今文科省では進めています。

学校運営協議会制度は、法律に基づいています。ここに関わる方々が、主体的に関わっていくことでコミュニティ・スクールを進めていきます。

図で示したものが美麻小中学校のイメージです。左側にあるのがコミュニティ・スクールとしての学校ですね。その中に学校運営協議会があります。そして右側にある緑の枠が、地域学校協働本部としての美麻スクールパートナーズというボランティアの組織です。この組織は、美麻においてはPTAも組織に入っていて、全員がボランティアで参加するとPTAが規約で決めています。スクールパートナーズについては、個人による参加で組織化しているのが美麻小中学校の特徴で、他の学校においてはこれが組織で構成しているところも多いです。文科省としては、もとは組

織で構成するものとして始まっていたのですが、地域によって様々な事情がありますので、どっちがいいかという点については、私は地域次第だと思っています。そして真ん中に、私が地域学校協働コーディネーターで配置され、本来は「地域学校協働推進員」と言うのですが、私たちの地域では「コーディネーター」という名前を残しています。それに学校の先生に、地域連携推進教員を置いて、連携しているところがミソです。私たちは、この表を今年見直しました。「支援」から「協働」へ意識改革をしようということで、コーディネーターの名前やスクールパートナーズの名前を変えました。この図は重要なので、何度も議論してみんなで変えているのです。また今年から、学校としては第三者評価を入れ、継続的な学校運営を行っていくと考えています。

学校運営協議会は大町市では15名以内と決めており、美麻では校長以外は全て地域の住民で構成されています。ポイントは、役職で選ばずに子どもたちとの関わりを配慮して委員を選考している点です。それから委員たちは、授業見学をやるだけでなく、ボランティアに参加している点も非常に大きなポイントです。協議会の役割としては、まず校長の学校運営方針の承認があります。ここでやるべきことは、地域が育てたい子どもの姿を皆で共有し、これを校長と協議を行い定めていくということです。これができないと地域と学校がバラバラになってしまいます。それから学校運営に対する意見です。委員さんたちが、子どもたちの様々な問題を知る、そして先生方の悩みを知るとか、こういうことが非常に重

要になってきます。それから学校評価です。委員さんたちが子どもをよく見ているか、継続的に見ているかということがポイントになってきます。学校評価は、ボランティアが全員参加しているところに意味があるのです。普段から、皆さん子どもを見ています。ここが美麻にとっての大きなポイントです。

それからよく問題になるのが、教職員の任用に関する意見を述べることです。教職員が抱えている問題を十分理解しないと、障害になると思われています。多くの学校では、この問題があるからやりたくないという抵抗感があるのです。しかし実際にやっていると、協議会の委員さんは教職員が悩んでいることを一緒に考えながら解決しようと努力しています。これは本当に、多くの学校の皆さんにわかってもらいたいと思っているのですが、なかなかここが理解してもらえないのです。

美麻小中学校のグランドデザインにおける教育理念は、多様性の尊重です。それから教育目標としては、心と体を開いて学ぶとしています。授業スタイルは協働の学びで一斉授業の形を私たちが取っていないということです。目指す子ども像は、自律した学習者を目指しています。私たちのグランドデザインにおいて重要なのは、地域の様々な役割が具体的に書いてあることです。こういうことを書いてあるグランドデザインは滅多にありません。これは地域の人にとって分かりやすいものだと思います。

私が行っているコーディネーターの仕事は、ほぼコミュニケーションであると考えています。校長先生や先生方、それから

子どもや保護者、地域住民と情報交換しながら様々な人を把握していくということです。情報管理しながら発信し、様々な企画を考えていくことも大事です。コーディネーターの役割としては、大きく2つあります。1つは学校運営に関すること、もう1つは地域学校協働活動に関することです。その際に重要なことは、学校運営協議会で共有するということです。これをやらずに進めてしまうと、すれ違いができてしまうので、みんなでここを十分に議論する必要があります。

コーディネーターは、地域の情報や考え方を学校につないでいきます。学校は意外にそれに気づいていません。逆に、学校にいるから気がつく課題がありまして、これを地域に共有していく。こういうこともやる必要があります。これをもとに協働活動を作っていくのですが、このときのポイントはできることからひとつずつ行うことです。他の学校の方からは、私たちの学校ではこんなことできないと言われますが、これはとにかくひとつずつやってきたから実現できたことなのです。それから、無理をしない、負担をかけないということも大事です。先生方やボランティアの方に負担をかけると、みんなはやる気がなくなってしまいます。そして、常に子どもを主体に考えているかどうかが一番重要です。

美麻小中学校にはコミュニティルームという部屋があります。学校での地域の方の居場所づくりが大事です。私の事務所にもなっていますが、ボランティアの拠点でもありPTAも使います。ここで協働活動の打ち合わせを行ったり、放課後塾をやったり、時には多様な子どもが使います。誰

にとっても使いやすい、自由に使える場所ということです。

#### (5) 地域学校協働活動とは

【ゲスト】地域学校協働活動についてお話しします。なぜこれが必要なのかというと、今は社会の変化がめまぐるしくこういうことに対応していかなければならないからです。それから多様な子どもの環境があり、貧困問題や虐待問題といった様々な課題があります。また、教育制度が変化してきて、求められるものが変化してきています。それから入試の変化もあります。そして、教員の働き方改革も問題になっていて、いかに負担を軽減するかという課題もあります。こういうことは、学校だけでは解決できません。それについては、地域の方の力も借りながら一緒になって解決していこうというのがポイントです。

美麻小中学校では、様々なボランティア活動を行っています。3つの部がありまして、総務部では、研修会を企画したり情報を発信したり、学校を理解してもらう活動を行っています。地域部は、環境整備を中心とした活動です。そして、大事な部分である学習部では様々な活動を行っています。国際交流をはじめ、放課後学習、放課後子ども教室、図書館の蔵書整理、遠足と、本当に多様です。今は特に遠足に行きたいボランティアが多いです。これが非常に大きな理由は、今、多様化する子どもたちをどう見守るのかということに関わるからです。地域で遠足を企画すると、地域の方が遠足のために道を整備してくれます。

学習の中でのボランティアの役割は非

常に大事です。教科学習も様々なことを行っていて、今年初めて行った特徴的なことは、授業の見守り活動というものです。これは何かというと、1年生が非常に多様な子どもたちで先生が今年は担任が大変ということで、3名のボランティアを動員しました。その結果たった一か月で、子どもたちが落ち着いてきました。この活動は初めての試みでしたが、先生からは非常に喜ばれました。様々な授業をしていますが、地域の人材を考えながら授業にマッチングしていくことを心がけています。

それから生活科や総合学習では、色々な部分で参加していますが、PTA 中心でよく行うのが朴葉巻きの授業です。これは1年生から4年生を対象に行っています。4年生での森の授業は大好評で、学校にある木を毎年1本切ってこれを授業で活用していくことをやっています。

あとは、地域学校協働活動についてですが、「支援活動」から「協働活動」へ転換していくということです。そもそも学校支援活動というのは、一方的な活動で上下関係があり、やってもらうという形になりますが、下手すると負担になるかもしれませんが、それに対して、協働活動は、双方向の活動であって、同じ目線で win-win の関係を保つということであり、まちづくりへ繋がっていく可能性が十分にあります。支援活動が醸成されると協働活動に変化してくる、皆さんの意識も変わってきますが、でもやはり意識的にこれを進めることは非常に重要だと思っています。

私たち美麻での地域学校協働活動の実践を考えてみたいと思います。まず地域とともに学ぶということで、美麻では2つの

大きな総合学習の授業があります。1つは美麻市民科と言いまして、7年から9年の3年間を継続的に行うグループ学習です。これは地域で学んでいく、地域の方と共に学ぶという姿勢で行っていて、7年生では地域を広く学びます。8年生になると、テーマを絞って深く学んでいきます。9年生になると、この学習成果を地域に還元していくという子どもたち主体の学びとして、子どもが何を学ぶか決めます。そのためその年によってどんな活動になるかは分かりません。地域の方が一緒に関わりながら行っていると、本当に学ぶことが多いです。これは地域の文化祭で発表してしまして、まとめの会ではポスターセッションを5年生以上で行っています。上級生の学びを見ることができるのは小中一貫ならでのことであり、自分たちがこの後こういうことをやっていくという意識を持つことができます。それから夢の時間というのがありまして、夢を語る子どもを育てたいという趣旨のもと、5年から9年で行っている活動です。内容は決めていないので、子どもの希望によって地域の皆さんがサポートしています。この授業は、子どもたちが何やるかわからないため見ているのが非常に楽しいです。

美麻市民科の活動については、平成30年には銀座 NAGANO に行きたいということで花豆の6次産業化に取り組んでプレゼンや商品を作って販売しました。それから次の年はネットワークマップ、これは美麻の地域のお店を繋ぎたいということで、過去と未来というテーマで聞き書きした冊子も作りました。今取り組んでいる活動は、「美麻かるたづくり」です。私たち

の役割として、色々なところで子どもたちのニーズに合わせて助成金を取ってきています。

それから地域づくり会議とスクールパートナーズは、協働で花フェスに出店したのですが、これは子どもたちが自主的に参加するものです。先生がいなくてもやります。これらの活動は、子どもたちが4代にわたって自主的に継承しています。先生がいなくても地域で進めているので、この学びは進んでいくのです。ちなみに子どもたちに対して、私たちは何も指示しません。子どもたちが勝手に進めていきます。

それから、もう一つの総合学習は、「和になれマップ」というもので、地図を作って、美麻のお店に色々聞いて様々なことをデータ化しています。すべて子どもたちの手作りです。この学びのために子どもたちが私たちに要求してきたことは、ファシリテーションとワークショップの学習でした。子どもたちはこの結果、地域の方とワークショップを行いました。

地域と協働でつくる地域行事ということで、美麻の地区の文化祭、これは7年生から9年生が授業で参加しています。自治会や公民館、住民自治組織で協働し協議しながら行っていますが、子どもたちが企画をやりたいて言い出して、子どもたちで企画もします。それから総合学習の発表も、ここで行っています。また花まめ商品の販売によって、とにかく活動への参加者が増え、世代も広がりました。発表を聞いて、地域の方が評価してくれるのです。これは非常に大事で、文化祭が活性化して、子どもたちには自己有用感が生まれます。

それから私たちのもう一つの念願だっ

たことが、運動会です。地域と学校と保育園合同で運動会をやりたいと、5年も協議しました。反対意見もありましたが、美麻の人口の約半数に及ぶ400人が参加してくれました。これによって多様な子どもを地域で見守ることができるようになりました。一番感動したのは子どもたちがこの運動会を開いてくれたことに感謝して、運動会を継続してくださいと訴えたことです。こうやって実行してみると、参加した皆が幸せになって、誰も反対しなくなりました。

ここで私の母校の話をしてします。私の母校では、職場体験として行っている活動なのですが、元々学校で商品を仕入れて販売して納税をやるという授業がありました。その授業を見て地域の方が、商店街でやりましょうと言ってくださり、この活動は15年間も続きました。その商店街は普段は閑散としているのですが、この活動によって非常に活性化されます。ところが去年でこの授業が無くなってしまいました。

この授業は子どもたちがお店でただ販売ただけではありません。実はお店の方と一緒に新しい商品を考え商品を作っていたのです。しかしこの活動はなくなってしまいました。これがもしコミュニティ・スクールで地域の人が学校運営に参加していたらどうなっていたでしょうか。おそらく継続を訴えたのではないのでしょうか。

美麻小中学校ではもう一つ、地域が主体で作る学びの場ということで、放課後学習と放課後子ども教室があります。私たちの活動はまず地域のボランティアが指導し、それから縦割りの環境学習を作っています。それから多様な子どもたちへの対応を

しています。まず、放課後学習は7年から9年の希望者を対象にしていて、5教科のサポートをします。授業でわからなかったことなどを学びます。特に、特認校で来られる方は他の学校で不登校だった場合もあるわけです。小学校のことが抜けていたり中学校1年生のことが抜けていたり、様々な子どもたちの対応をします。

それから放課後子ども教室は3年から8年を対象にしており、体験的な学習を掲げて、毎月違うテーマで活動をしています。この授業は、引きこもりがちな子どもや、多様な子どもたちが楽しく学んでいて、不登校気味の子どもも休まないで来ています。そして何よりもすごいのが、大人が幸せそうで、大人も楽しめることです。ですので、来年は大人も参加できるようにしたいと考えています。

この協働活動を育てるために、ボランティアの研修会が重要になってきます。毎年様々なテーマで行っていて、最初支援ボランティアはどのような意味があるのかということから始めたのですが、そのうちに色々なリスクマネジメントを行ったり、ワークショップを進めていったりしました。近年は総合的な学習をどのように支えるか、あるいは子どもたちに授業もして、先生方を対象としたワークショップを行っています。地域の方が教師と一緒に対話しながら学んでいるのです。去年は、歴代の5代の校長を招いて、学校づくりの思いをみんなで共有しました。

子どもたちがこういうことを通じてどう変化してきたのかというと、表現力では、子どもたちは伝わる発表をしようって言っています。子どもたちが平気で大人と会

話できるようになりました。様々な予想外の場面でも、自分で考えて行動して解決していくのです。そして、何よりも個人の尊重、個性の尊重を大事にしていて、みんなそれぞれの立ち位置があります。近頃は、自分の夢を語れる子が増えてきましたし、上級生を尊敬している下級生をよく見かけます。地域の良さを評価して、地域貢献したいと子どもたちが言っています。そのような子どもたちの姿を見て、私は子どもたちが自律した学習者になってきたということを実感しています。

#### (6) コミュニティ・スクールの課題と今後

【ゲスト】ここからは、コミュニティ・スクールの課題と今後についてお話します。コミュニティ・スクールの現状には色々ありますが、今文科省が導入を努力義務化しています。私は義務化したからみんながやるということは駄目だと思っています。必要だからやらないと意味がないのです。私たちはこれは必要なことだと思ったのでこの活動を進めています。それから、学校運営協議会と地域学校協働本部、この両方が必要になりますが、これが分かってない、あるいはできていないことが非常に多いです。長野ですと信州型コミュニティ・スクールがありますが、形だけ導入している例がいくつも見受けられます。

それから、コーディネーターの人材や予算が現在課題になっています。また協働活動がまだ理解されてなくて進んでないこともありますし、進めたことによって負担を感じている教員もいます。これは、適切

にコミュニティ・スクールが導入されていない証拠です。特に大事なものは、授業です。とにかく授業づくりができないと学校はうまく機能しないので、ボランティアを入れる時には、何のために入れてどういうことを目指していくのかということが重要です。要するに、育てたい子ども像をちゃんと定めなければならないということです。

コミュニティ・スクールを継続するために必要なことは、地域と学校の役割分担をはっきりさせることです。どこを協働するのか、これをちゃんと考えることが必要となります。それから、研修会をちゃんと適切に行っていくことも重要です。そして授業づくりの協働活動の位置付けや目当てを定めてないと、何のために活動を行うのかわからなくなってしまいます。コミュニティ・スクールに関しては、常に皆さんが主体的に関わって活動を先へ進めるということが大事で、現状維持は停滞でだんだん先細りになってしまいます。

役割分担については先ほど少しお話ししましたが、地域でのテーマを考えてほしいと思います。必ず課題があります。その時に、学校が何を行うか、地域が何を行うか、そして協働で何をするかをちゃんと考える必要があります。よく課題があってもみんな悩んでいるのですが、課題があるのだったら子どもと一緒に解決する姿勢で行くと、そこから学びのチャンスが生まれてきます。

コミュニティ・スクールを成功させるためには、学校と地域、そして保護者、それから行政も思いを共有するように進めていく必要があります。私たちの地域では、

かなりこれがうまくいっていると思います。そこには、相当コミュニケーションを取る必要があって、そこで「熟議」という言葉が出てきます。コミュニティ・スクールが創り出す学校と地域の将来像として、私たちの考えているものはこういうものですが、地域が学校運営に参加し育てたい子どもの姿を共有することによって地域が理解し、そして先生たちが理解し、様々な子どもたちのための時間が持てるようになります。その結果、学校と地域の様々な可能性が広がってくることによって、お互いの思いやりの心をそれぞれが持つのです。多様性を認め合うことによって、子どもが行きたい、子どもの親が行かせたい、先生はやりがいがあって、地域の人はこの学校がいいよと誇れるようになります。これがまちづくりに繋がるのです。優しいまちになって、住みたいまちが実現していきます。しかし、このことは地域オリジナルでしかできないのです。そこは真似たらいというわけではないので、地域の中で考えるしかないのです。

## (7) 質疑応答

【学生】各家庭からの協賛金は、年間どれくらいですか。

【ゲスト】家庭からは一件 300 円です。300 円は地域づくりのための協賛金です。ボランティアに対する協賛金は必要に応じて集めているので、活動に対して今お願いしているのは、一口 3000 円です。それは全て、他の補助金と合わせて学習の成果物を地域に配るものですから、毎年それを

使っています。

そのような感じの協賛金でして、今年子どもたちが地域のかるたを作っていて、これも3000円の協賛金いただく予定ですが、頂いた方にはかるたを差し上げる予定です。

【学生】9年生が、高校進学後に困っていることはありませんか。

【ゲスト】私たちがこういう活動を行っているとは卒業生は目標が定まっているように見えます。何をやりたいか、イメージを持っているのです。近頃は、必ずしも学力重視ではなく、学校見学に行き、その学校がどういう雰囲気か、何をやっているかということを見えています。具体的な目標に合わせて行く方向を決めるなど、子どもたちに最近そういう変化が出てきたなと感じています。

【学生】移住者が移住してくる時、生活のしやすさだけではなく働き口があるかも重要な要素となると思います。生活のしやすさに関しては、講義を通して理解できましたが、もう一つの働き口に関して、自分たちで作っていったのか、元々周囲に大きな雇用を生み出すものがあり、そこを誘致しているのかを教えてください。

【ゲスト】私は移住相談員なので一番重要などころでもあります。まず移住相談の時に、その方の今の職業と何をやりたいと思っているかを必ず聞くようにしています。その中で、色々な選択肢がありますが、その人の職業適性に応じて、この辺にはない

職業があったらちょっと足を伸ばして働くことを勧めるときもあります。それから、この地域特有の仕事として観光業はものすごく多いです。

最近勧めているのは、起業です。20代から起業の相談が来て、町の助成金について案内することもあります。

ただ、移住される方は仕事をメインに考えてない人がたくさんいます。とにかく何がやりたいのかということが大切です。やりたいことが達成できれば、生活のレベルも落としても良いという方もいっぱいいらっしゃいますし、仕事が一番ではないということもあります。本当に、その人の価値観によって違うので、それに合わせたニーズを考えていくことが大切かと思えます。

今、美麻でこういったまちづくりをやっている中で、こういう雰囲気のところに住みたい方や、都会での価値観を変えようと思ってきている方が多いです。まさにコロナ禍において、ライフスタイルが本当に多様化してきている中で、それぞれのあり方でいいと後押しされている感じもします。ですので、皆さんが次の一步を踏み出すのかということでしょうから、移住という点については、チャンスの時ではあるかなと個人的に思っています。

【学生】子どもへのかかわりを配慮した委員の選任について、具体的にどういった人が選ばれるのでしょうか。

【ゲスト】教員が適任だと考えられる方もいますが、美麻の委員の中には元教員は一人しかいません。全て地域の方です。私た

ちは地域づくりを行っているので、地域づくりに関わっている人がとても多いです。

地域づくりを行うということは、子どもたちも関わる機会が多いです。例えば、猟友会でジビエの活動をやっていらっしゃる方とか、きのこに詳しい方は子どもたちと自然に関わっています。何らかの形で皆ボランティアとして関わっている、その中でこの方は重要な、この人たちの意見は是非欲しいなという方を入れているのが現状です。小さい地域なので、皆何か役職を持っています。ですがその役職で選んでいるわけではなく、たまたま選ぶとその人の役職までついて来てしまうのが現状です。

【学生】地域で色々な考えの違いが出てくる中で、それをどうまとめるのか、どんな苦労があるのか、あと、モチベーションや熱意をどのように維持されてらっしゃるのでしょうか。

【ゲスト】地域の方に、特に移住者が多いと多様性が生まれます。人によって、それぞれ得意分野があります。ですからその得意分野を引っ張り出すことを常に考えています。そして中に入ってしまうと無責任なことは言えなくなります。トラブルはありますが、そういったことは運営協議会でも共有しています。その中で、トラブルに対する解決策を、みんなの意見を聞きながら考え、それぞれ自分の活動の中でも動いてくれるようになります。そうやって、みんなの力を結集しながらやっています。

モチベーションに関しては、毎年子どもたちがやろうとしていることを一生涯

サポートしているのですが、子どもたちのモチベーションが高いので、関わる人たちのモチベーションも高くなっていきます。子どもたちに対して何ができるかをみんなが考えて動いています。毎年、新しいことに挑戦し、新しいものを作ることは、すごいエネルギーが必要で、モチベーションが上がります。しかし、それをただ継続していくだけでは、モチベーションは下がってしまいます。ですから、常に皆が主体的になって次のものに取り組んでいく、次の課題に取り組んでいくことで、みんなが主体的になるのです。

【学生】教員は異動で入れ替わっていくことになり、その中でも今まであったトラブルを共有しているのでしょうか。また、教員によっては、地域との関わり方はそれぞれだと思います。教員間の違いはどのようなものがありますか。

【ゲスト】教員のテンションも考え方もそれぞれです。私はコーディネーターとして、その人その人を見ています。私は普段校長先生の席に座ることが多いのですが、そこに座ると先生方がよく見えます。それで隣は副校長と教務主任なので、色々なことを喋って、先生たちと雑談しています。そうやって色々に関わりながら、この先生は何を考えているのか、どういう人なのかと常に見ているわけです。それぞれの教員の方との距離感は違います。本当にべったりの人もいれば、必要なことだけという方もいて、それを超えてやると先生方もやりづらいと思うので、距離感を自分で計ります。しかし、そういうことをやることによって、

引っ張って先生が中心になって、どんどん盛り上げていくから、全体としては高まるのです。

また、先生方は、子どもたちの成長で変わります。やったことによって結果が出て子どもが成長すると、先生はみんな納得してくれます。人間同士なので、コミュニケーションがやはり重要だと思います。

【学生】大町では素晴らしい取り組みがたくさんありますが、一方で地域との関わりや連携が無い学校は多いと思います。学校と地域がつながりを持つためにはどのような取り組みが必要でしょうか。

【ゲスト】地域には、キーマンになる人がいるはずですが、そういう思いを持っている人はいてもその人を探せていないのではないかと思います。ですから、地域を知っている人と学校が繋がらなくてはならないと思います。これは、PTAでも教育委員会でも、どんな経由でもいいので、そういった人材を探すことから始まると私は思っています。

最初から立派なコーディネーターはどこにもいません。ではどうするかと言うと、地域が育てるのです。それから意識的に学校も育てるのです。そして美麻小中学校のコーディネーターは私1人だとは思っていません。私を支えてくれる人が何人もいます。同じような人を一人一人増やしていくことが大事なかなと思います。

しかしこれは学校だけのことだったらこんなにできないです。やはり自分たちの地域を住みやすくしたい、周りの人が幸せでニコニコして欲しいという思いがある

からできることです。ですからまちづくりと学校づくりは切り離せないのだと思います。ちなみに移住も切り離せなくて、全部がつながっています。私たちの学校も、初めは全然外を見ていませんでした。総合学習を始めた時は、温度差がありました。例えば、私たちが誰でも使えるホームページを作って学校に提供しに行ったときは、反応がありませんでした。スタートはそういうものです。一つは諦めないことと、もう一つはタイミングです。タイミングには人が揃う時があります。ですからそのタイミングを逃さないことも非常に大事です。

学校も地域も変わることに抵抗があります。確かに移住者は色々な意識を持っている方が多いです。その方が外からものを言っているだけでは何も変わらないと思っています。自分が中に入って一緒にやってみて、一緒に苦労して、中でこれを変えたいって言い出すと、協力してくれる人が少しずつ出てくるのだと思います。その信頼を繋ぐには、5年、10年かかります。私もこのまちから出て行こうかと何度も思ったことがあります。でも10年ぐらい経つと、本当に本音を言ってくれるようになります。

私たちの運営協議会には、学校に批判的な人にも入っていただきました。その人たちを中に入れると、ただの批判では済まないからです。自分もなんかしなければならぬので、その人の意見は変わります。

地域づくりをやっている中で考えることは、全員参加は無理ということです。今、全戸にお金を払ってもらっていること自体すごいことです。2年かかりました。そのために、できるだけ私たちは皆さんに

情報提供したり、新聞やコミュニティアレンダーを作ったりして全戸配布しています。

参加するかしらないかはそれぞれ個人の思いです。私たちがまちづくりを行っている中で言われたのは、大きな反対運動が起こらなかったら合格ということです。そしてあとは自分たちの信念です。当然、会議をやれば、それは違いただろうという話も出てきます。しかし、私たちは、このまちを良くしたい、みんなを幸せにしたいという思いを共有して活動を行っています。